

特別活動における児童生徒の自己実現を促す小中連携の在り方

ー徳島県特別活動小中連携研究指定校事業での取組を通してー

教職員研修課 谷 聡司 樋口七津恵
森 裕二郎 西谷 央
宍野 彰彦 住友 美香

要 旨

県教育委員会が令和4年度から中学校区を実践研究モデル地域に指定し、実施している徳島県特別活動小中連携研究指定校事業について、児童生徒や教職員のアンケートなどの分析により、小学校と中学校が連携し、モデル地域全体の特別活動が充実することで、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自己実現につながるための児童生徒の自主的、実践的な態度が育まれていることが確認できた。

キーワード：小中連携、合意形成、集団の一員、よりよい生活や人間関係、自己実現、自主的、実践的な態度

I はじめに

現在は、将来の予測が困難なVUCAの時代と言われ、一人一人が社会の担い手となること、そして社会全体のウェルビーイングの向上が重要とされている。しかし、コロナ禍に学校行事の規模縮小や学習活動の制限が行われ、児童生徒同士が交流する機会は減少し、他者との「つながり」を実感する場が乏しくなった。人と人とが親和的関係を結ぶために、他者の考えを共感的に理解したり、他者の存在を意識して自分の思いを伝えたりするための方法を学ぶ機会が減ってきているという報道も多く流れた。

そこで、県教育委員会では、令和4年度に徳島県特別活動小中連携研究指定校事業「OUR徳島特活いきいきプロジェクト」を立ち上げた（図1）。この事業では、お互いのよさや可能性を認識するとともに、協働しながら豊かな人生を主体的に切り拓こうとする児童生徒の「人間関係形成」や「社会参画」、「自己実現」に係る資質・能力の育成を図ることを目的としている。県中央、県西、県南に指定した実践研究モデル地域の小学校と中学校（以下、研究指定校）

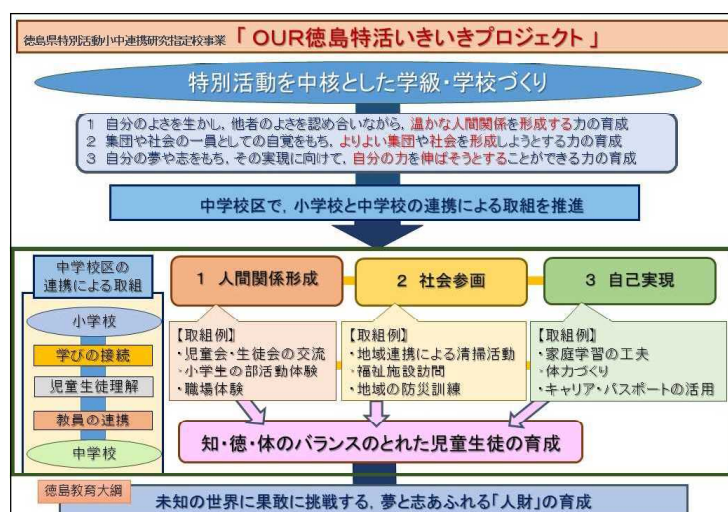


図1 「OUR徳島特活いきいきプロジェクト」

が特別活動の中核として連携を図っていく。

令和4年度は各研究指定校の特別活動教育の充実に重点を置き、事業を進めた。令和5年度からは、小中連携にも重点を置いて研究を進めていくため、「OUR徳島特活小中連携いきいき事業」とし、学びの羅針盤として県内へ周知した。令和6年度は、新たに研究指定エリアを選定するとともに、令和5年度までの研究指定校から小学校1校、中学校1校を研究継続校として指定し、更なる研究の深化と県内外への周知を進めている。

特別活動は、児童生徒が様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する活動である。本研究では、小学校と中学校が連携し、モデル地域全体の特別活動が充実することにより、自己実現につながる児童生徒の自主的、実践的な態度が育まれているかをアンケート等の分析から検証する。

II 研究仮説

同中学校区の小学校と中学校が特別活動を軸としながら連携すれば、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自己実現につながるための児童生徒の自主的、実践的な態度を育むことができるであろう。

III 研究の実際

1 小学校と中学校が連携して特別活動を充実させるために

(1) 徳島県特別活動小中連携研究指定校事業の概要

表1に示したモデル地域の研究指定校及び研究継続校は、児童生徒や学校、地域の実情に応じた研究目標を設定し、次の内容を基に研究に取り組み、特別活動の充実を図ることとした。

- 小中連携のもと、各校区で研究構想図を作成し（図2～図5）、県教育委員会の指導助言を受け、特別活動に関する実践的な研究を行うとともに、新たな指導事例・連携事例を創出する。

○本事業の研究会を年間3回程度（研究継続校は年間1回）開催し、研究授業及び公開授業を実施するとともに、本事業に関する成果を報告する。

表1 徳島県特別活動小中連携研究指定校事業 研究指定校及び研究継続校
【令和4年度・5年度の研究指定校】

	小学校	中学校
中央部エリア	徳島市A小学校	徳島市B中学校
南部エリア	那賀町立C小学校	那賀町立D中学校
西部エリア	美馬市立E小学校	美馬市立F中学校

【令和6年度の研究指定校と研究継続校】

	小学校	中学校
研究指定エリア	美馬市立G小学校	美馬市立H中学校
研究継続校	徳島市A小学校	美馬市立F中学校



図2 中央部エリアの研究構想図



図3 南部エリアの研究構想図



図4 西部エリアの研究構想図



図5 研究指定エリアの研究構想図

(2) 令和4年度・5年度の研究指定校のスケジュール

【中央部エリア】(徳島市A小学校と徳島市B中学校)

令和4年度 ・第1期研究会：令和4年6月17日(金)

・第2期研究会：令和4年12月1日(木)

・第3期研究会：令和5年1月19日(木)

- 令和5年度 ・第1期研究会：令和5年7月11日（火）
・第2期研究会：令和5年10月11日（水）
・第3期研究会：令和5年12月4日（月）

【南部エリア】（那賀町立C小学校と那賀町立D中学校）

- 令和4年度 ・第1期研究会：令和4年7月4日（月）
・第2期研究会：令和4年11月10日（木）
・第3期研究会：令和5年1月26日（木）

- 令和5年度 ・第1期研究会：令和5年6月19日（月）
・第2期研究会：令和5年10月16日（月）
・第3期研究会：令和6年1月29日（月）

【西部エリア】（美馬市立E小学校と美馬市立F中学校）

- 令和4年度 ・第1期研究会：令和4年7月1日（金）
・第2期研究会：令和4年11月24日（木）
・第3期研究会：令和5年1月30日（月）

- 令和5年度 ・第1期研究会：令和5年7月14日（金）
・第2期研究会：令和5年9月19日（火）
・第3期研究会：令和5年12月1日（金）

（3）令和6年度の研究指定校と研究継続校のスケジュール

【研究指定エリア】（美馬市立G小学校と美馬市立H中学校）

- ・第1期研究会：令和6年5月13日（月）
- ・第2期研究会：令和6年10月9日（水）
- ・第3期研究会：令和7年1月27日（月）

【研究継続校】（徳島市A小学校）継続小学校研究会：令和6年11月5日（火）

（美馬市立F中学校）継続中学校研究会：令和6年12月2日（月）

2 研究指定校による実践事例

特別活動では、多様な他者との様々な集団活動を行うことを基本とし、そこでの話し合い活動を全ての中心に置いている。研究指定校の各研究会では、児童生徒の自発的・自治的活動を推進するため、学級や学校における集団や自己の生活上の課題を見だし、解決するための合意形成を図る学級活動（1）や児童会・生徒会活動に焦点を当てて、研究授業や公開授業を行うこととした。そして、違いや多様性が受け入れられ、認め合える支持的な風土が醸成されているかという「人間関係形成」の視点や、自分の役割を果たしつつ、共通の目標をみんなでやり遂げているかという「社会参画」の視点から授業などを参観し、県教育委員会が本事業のアドバイザーとして依頼している講師（以下、講師）とともに指導助言を行った。また、各研究会の閉会前には、講師から研究推進に向けた今後の特別活動の取組について、全教職員が指導を仰ぐ機会を設けた。各エリアで行われた年間3回の研究会での学びを生かしながら、日常の学校生活においても各校で様々な実践が行われている。

（1）児童生徒が主体となる場や機会の提供

①中庭広場の開放

徳島市A小学校では、令和4年度第1期研究会の際、児童が主体的に活動することの重要性

について、講師から助言があった。その内容を基に、それまでは使用していなかった中庭広場を児童が活動できるように開放することとした。

初めは、児童会の児童が中心となり、動画を使って中庭広場の名称について募集した(図6)。多くの意見が集まり、「夢のメダカ庭園」に決定した。その後、児童会だけではなく、高学年の児童やそれぞれの委員会が中心となり、動画を使って「おまつり」や「しりとり大会」への参加を呼び掛け(図7)、休み時間の活動に多くの児童が参加した。各学年の代表や委員会の代表が集まって話し合いを行う代表委員会でも、使い方について話し合うなど、中庭広場が効果的に活用されていた。その後の研究会では、休み時間に児童が自由に参加できる「文字並べ大会」や「150ぴったりゲーム大会」などにおいて、児童が主体的に運営している姿を見ることができた(図8・図9)。

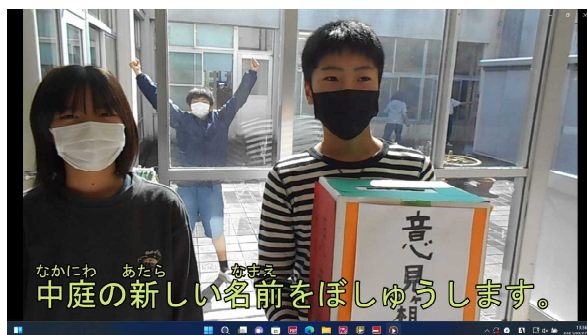


図6 中庭広場の名称募集動画



図7 「おまつり」参加募集動画



図8 文字並べ大会



図9 150ぴったりゲーム大会

②児童がつくる学校の特色を生かした地域遠足

那賀町立C小学校では、開校当初より学校行事として地域遠足があり、その運営には6年生の児童が携わっている。1～5年生の児童は、6年生の児童から各コースの説明を聞いた後に行きたいコースを希望して提出する。日常的に活動している異年齢集団班とは違い、希望表を基にした異年齢の班で活動するため、全校児童が楽しみにしている学校行事の一つである。令和2年度・3年度はコロナ禍により中止していたが、令和4年度には、再び実施することが決まった。3年ぶりの実施となり、運営に携わる6年生が、先輩的那賀町立D中学校の3年生に、下見をする際の留意点や班をまとめるためのポイントなどをインタビューすることにした。そして、インタビューした内容を踏まえながら、6つのグループに分かれて各コースの内容を考えたり、当日に地域の方の話が聞けるよう直接交渉したりするなどの準備をした。令和4年度

第2期研究会では、児童会活動として、6年生がグループごとに地域遠足のコースについて紹介する集会を行った（図10）。終末の質疑応答では、1～5年生の児童が自分事として質問する姿や6年生が各グループのリーダーとして運営する姿が見られた（図11）。その後、希望を基にグループ分けを行い、遠足当日も無事に実践することができた。令和5年度以降も、中学校と連携しながら地域遠足が行われている。



図10 地域遠足についての児童会集会



図11 1年生児童が質問する様子

③児童生徒の交流活動

美馬市立E小学校と美馬市立F中学校は同敷地内にあるため、開校より中学生が小学生へ読み聞かせをしたり、小学生が中学生の外国語の授業を参観したりといった交流活動が活発に行われていたが、コロナ禍では交流活動を中止にしていた。しかし、研究指定校となったことをきっかけに、交流活動を再開するとともに児童生徒が主体となった交流活動になるように転換を図った。小学校4～6年と中学校1～3年でペア学級をつくり、小学生と中学生が1回ずつ運営の中心となるよう年間2回の交流活動の機会を設けた。令和4年度第1期研究会では、美馬市立E小学校4年2組の児童と美馬市立F中学校1年2組の生徒の交流活動を行い（図12）、事前の学級活動で話し合っただめた内容について、児童が主体的に運営した。年間2回の交流活動を経た後の令和4年度第2期研究会では、「ペア学級である3年2組の生徒に受験を応援するプレゼントをおくろう」という児童から自発的に出てきた思いを基にした議題で学級活動を行った（図13）。児童生徒が主体となった交流活動を行うことで、中学生のあいさつ運動に小学生が自主的に参加したり、下校中にペア学級の小学生と中学生が話を歩いていたりするなど、日常の学校生活の中で人間関係が形成されている姿が多く見られるようになった。現在は、小中合同の避難訓練や中学生から小学生への読み聞かせも行っている。



図12 交流活動



図13 交流活動後の学級活動

(2) 小中のつながりを意識した取組

①児童会と生徒会の交流会

徳島市A小学校と徳島市B中学校は研究指定校区となり、研修会などで両校の教職員同士が話す機会が多くなった。そこで、徳島市B中学校は徳島市A小学校に加え、同校区内にある他の小学校一校を含めて、さらに小中のつながりを意識した取組を進めた。その様子は、令和5年度第3期研究会の各校の取組説明の中で、プレゼンテーションにより紹介があった。徳島型メンター制度を活用して小中合同の研修を行い（図14）、児童生徒同士が交流し、つながりを意識する機会を設けるとよいのではないかと提案が教職員同士の話し合いの中から生まれた。その話し合いを基に、同中学校区の小学校と中学校が連絡調整し、オンラインを用いて、児童会代表と生徒会代表による自校の取組についての意見交流を行った。また、学びの接続を意識して、中学校の防災委員会が各小学校へ出掛け、5年生が総合的な学習の時間に実施している防災学習の中で話をする機会も設けた（図15）。



図14 小中合同の研修

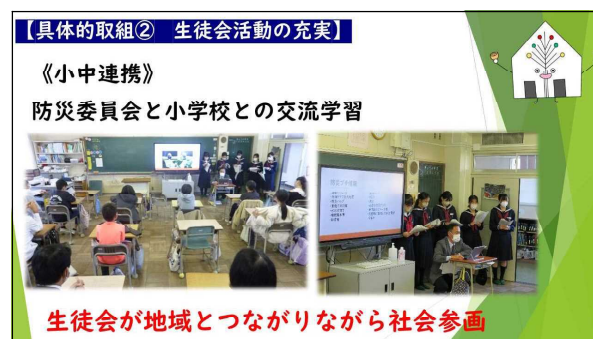


図15 防災についての交流学习

②学校行事の新設

那賀町立D中学校は、毎年、新入生に向けてのオリエンテーションを実施しており、学校の規則や部活動の紹介についての説明を教職員が行っていた。研究指定校となり、講師からの助言を受けて、オリエンテーションの一部を生徒に委ねることとした。新入生との関わりを考慮し、主担当を1年生の生徒に任せ、新入生との意見交流は全学年の生徒が参加できるようにした。令和4年度第3期研究会では、生徒が規則や生活マナーについての説明を劇にして表現した（図16）。講師から、生徒の自発的な思いを大切にすることの重要性についての助言があり、令和5年度はオリエンテーションの内容も、生徒同士で考えることができるようにした。内容を話し合う中で、学校での過ごし方について劇で示しながら説明することに決まった。そして、令和5年度第3期研究会では、学校での過ごし方を劇にして表現した（図17）。また、意見交流では、那賀町立C小学校の児童の質問に対し、中学生が自ら意欲的に回答していた。



図16 生活マナーについての説明



図17 学校での過ごし方の劇

③小中合同研修の定期的な開催

年間3回の研究会では、各エリアの同校区の小学校と中学校の教職員が研究授業や公開授業を参観するとともに、県教育委員会招聘の講師による各校区の実状に合わせた内容の講話を合同で聞くことで学びを深めることができるようにしている。美馬市立E小学校と美馬市立F中学校では、第2期研究会に向けての合同の研修会を夏季休業期間中に行った。研修会では、初めに交流活動後の児童生徒からの感想を共有した（図18）。その後、それぞれの教職員が感じているこれまでの成果や課題について意見交流をするとともに、今後の研究の方向性について協議した（図19）。その結果、校区としての共通の課題は「児童生徒の自尊感情が低いこと」であることを共通理解し、毎時間の授業の中でめあての提示と振り返りの時間を設定することになった。



図18 交流活動の様子

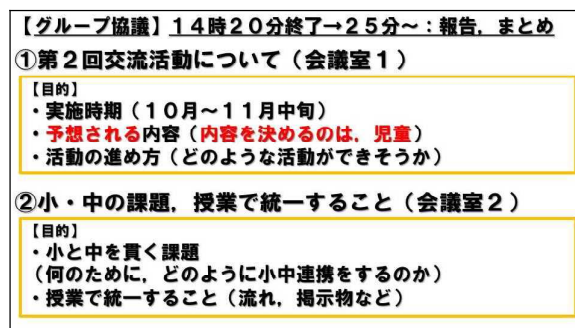


図19 今後の研究の方向性についての協議

④研究構想図の改善

研究指定校区ごとに研究構想図を作成できるよう、研究構想図の見本例を提示してきた。令和4年度の見本例では（図20）、研究の方向性を教職員が共通理解し、めざす児童生徒の姿に近付くような取組の内容を考えることができるようにした。しかし、めざす児童生徒の姿が抽象的になってしまっていたことが、各校から課題に挙げられた。そこで、令和5年度の見本例では（図21）、めざす児童生徒の姿を明確にして、指導の工夫ができるように説明を加えた。また、特に焦点化して取り組む項目は色を変えたり、取組内容に応じた写真を添付したりして、研究の方向性がより明確になるように工夫した。

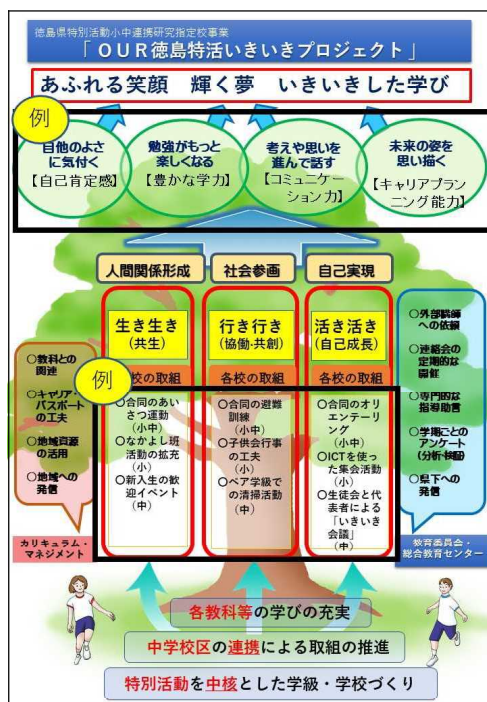


図20 令和4年度の研究構想図例

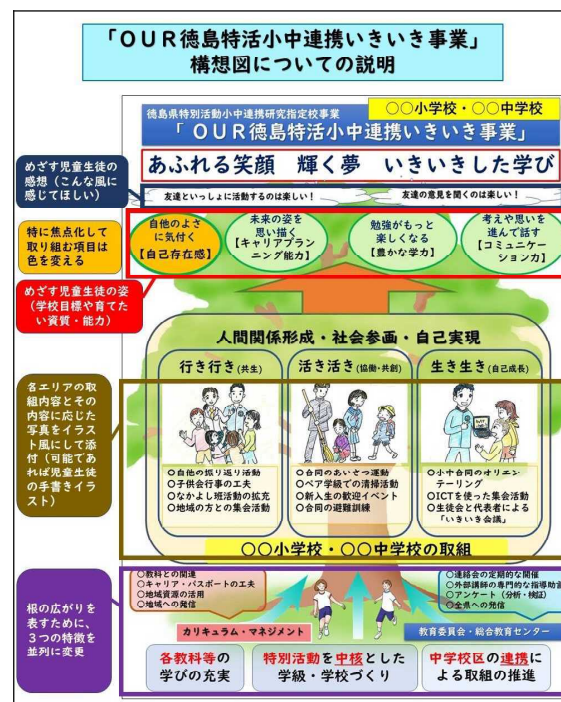


図21 令和5年度の研究構想図例

(3) 児童生徒の自発的・自治的な取組の推進

①一貫した学級活動グッズの作成

研究指定校の中学校では、集団として意見をまとめる学級活動(1)の話し合い活動において小学校からの積み重ねや経験を生かして行えるように、小学校で使用しているものを参考にして、学級活動グッズの作成を行った。初めは、議題や提案理由、決まっていることを表示する学級活動グッズを使用していたが(図22)、短冊型ホワイトボードを用いて話し合う小学生の様子を参観し、意見を分類するために操作したり、修正してすぐに貼り直したりできるように、中学校でも同様に短冊型ホワイトボードも作成し、使用することにした(図23)。授業開始前にそれぞれの生徒が意見を書いた短冊型ホワイトボードを掲示しておくことで、自分の考えをもって話し合い活動に臨むことができるようになった。学級会前に黒板へ貼り替えることで、準備にかかる時間が短くなり、掲示された意見を見ながら話し合いの進め方を考えることもできるため、司会グループも話し合いの計画を入念に行って話し合い活動に臨むことができるようになった。



図22 学級活動グッズを使用した板書



図23 短冊型ホワイトボードを用いた板書

②「選ぶ」から「創る」話し合い活動へ

研究会を重ねる中で、各校の教職員は、集団活動における合意形成では、同調圧力に流されることなく、批判的思考をもち、他者の意見を受け入れつつ自分の意見も主張できるようにすることの大切さを学んだ。また、賛成か、反対かというだけでいくつかの選択肢の中から選ぶのではなく、議題を児童生徒が自分事として捉え、解決すべき問題として話し合いに参加し、新たな考えや価値を生み出すことの重要性を学んだ。そこで、各校の学級活動で、工夫について重点を置いて話し合うことにした。小学校では、朝の活動の時間等を活用して、「何をするか」については事前に学級全員で決め、提案理由（現状の問題・解決の方法・解決後のイメージ）を意識して話し合うことができるよう、展開を工夫して授業を計画した。焦点化を図り、それぞれのゲームの工夫について話し合った後の板書には（図24）、現状の問題に対して質的改善となる新しい意見が色を変えて書かれており、折り合いをつけながら話し合った軌跡を感じることができる。令和5年度第3期研究会の中学校の授業では、小学校での話し合い活動の経験を生かし、「何をどのようにするか」という学級会を行った。一つ一つの意見に対して、学級全員で意見を伝え合い、折り合いをつけながら話し合っていた（図25）。

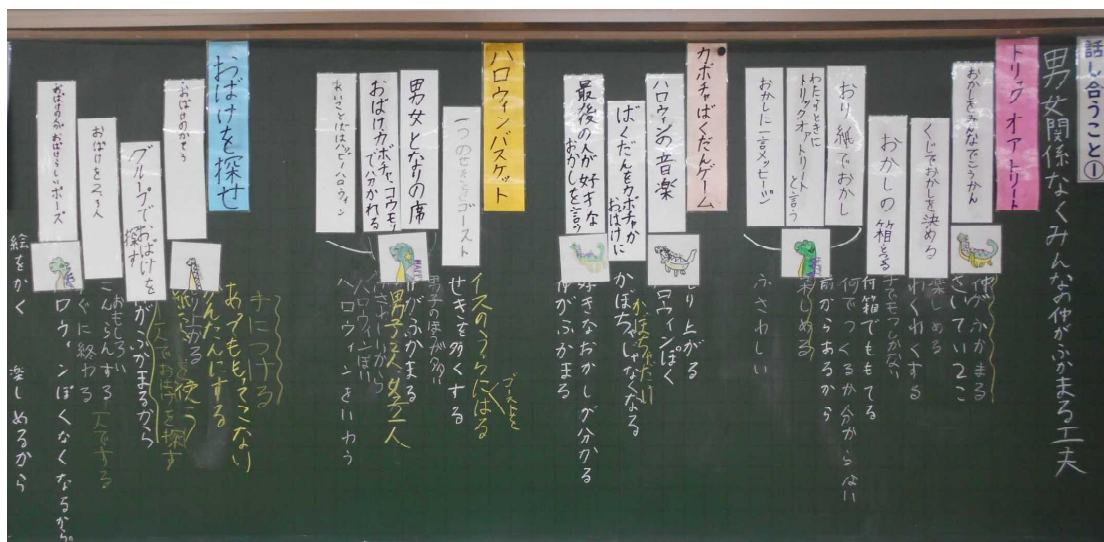


図24 工夫について話し合った後の板書

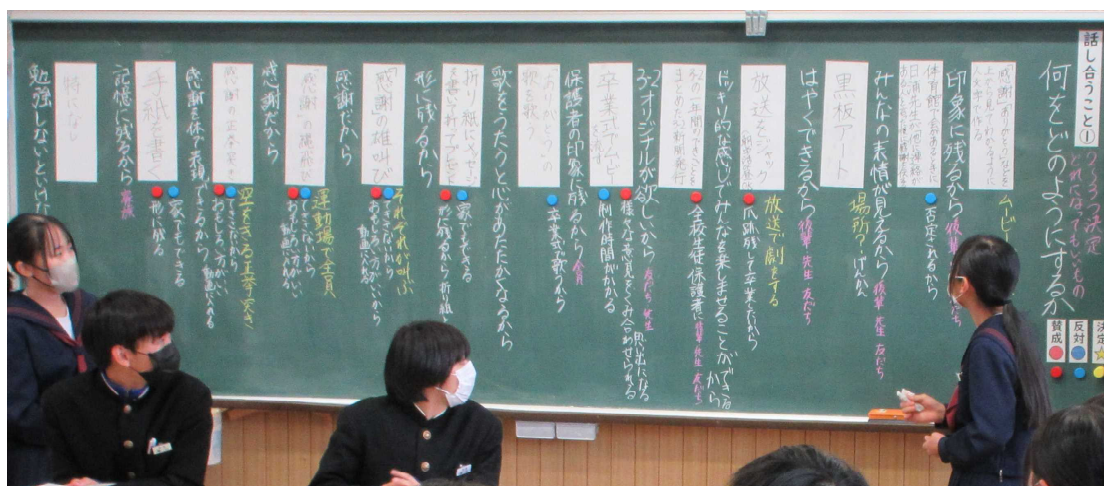


図25 「何をどのようにするか」について話し合う様子

3 児童生徒・教職員アンケートの実施

令和4年度の事業開始より、各校において、事業の成果や課題を検証するため、それぞれの研究会後に児童生徒アンケートを実施してきた。全国学力・学習状況調査の質問項目を参考にし、「人間関係形成」、「自己実現」、「社会参画」の視点を基にして、問いを設けた。また、講師の「児童生徒の変容には、教職員の関わり方が重要である」という話を受け、令和4年度第2期研究会後より、児童生徒との関わり方や小中連携事業に関する項目についての問いを設けた教職員アンケートも実施してきた。アンケート後の集計や分析のことを踏まえ、「当てはまる」、「どちらかと言えば当てはまる」、「どちらかと言えば当てはまらない」、「当てはまらない」の選択式で回答する4件法を用いた。アンケートの実施後は、学校ごとにそれぞれの結果をまとめたものを基にしながら、各校と県教育委員会が研究の進捗状況などの共有を図り、研究を進めた。

IV アンケートの分析と考察による研究の成果と課題

1 研究の成果

特別活動の評価において、最も大切なことは、児童生徒一人一人のよさや可能性を学習過程から積極的に認めるようにするとともに、特別活動で育成をめざす資質・能力がどのように育まれているかということについて、各個人の活動状況を基に、評価を進めていくということである。そこで、教職員アンケート「2年間（今年度異動してきた方は1年間）の研究会を終えて、成果があったと感じていることがあれば、書いてください。」の項目から得られた回答や、児童生徒・教職員アンケート結果を基に、成果の考察を行う。

(1) 児童の変容

2年間事業に取り組んだ徳島市A小学校、那賀町立C小学校、美馬市立E小学校のアンケート結果をまとめたものを基に、分析と考察を行う。「1回目の令和4年度第1期研究会後」、「1年目の研究のまとめである令和4年度第3期研究会後」、「2年間の研究のまとめである令和5年度第3期研究会後」の3回の結果について、肯定的な回答の割合と、「当てはまる」と回答した割合の一部を表に示す。小学校1年・2年生に対してのアンケートについても実施しているが、対象の半数程度の児童が年度ごとに新しく入学してくることから、①～③では、小学校3年～6年生の児童アンケート結果について考察する。

①学校の魅力向上

(教職員アンケートより)

- ・学校を楽しんでいる児童が増え、学校がより明るくなったように感じる。
- ・自分にできることを考え、よりよい学級づくりに積極的に関わるようになった。
- ・生活の様々な場面で、児童がいきいきと活動する姿をよく見かけるようになり、学校全体として活気が出てきた。
- ・話し合いを重ねることで、提案理由を意識したり、合意形成を図ったりしながら話し合いを進められるようになってきている。
- ・自分たちで計画し、実践する楽しさを知ったことで、友達の意見をよりよく発展させていこうとする姿が見られるようになってきた。

児童主体の学校づくりを進めていくためには、児童相互のよりよい人間関係は欠かすことができない。表2の【学校へ行くのが楽しい】、【グループで活動することは楽しい】について肯

定的な回答の割合が高まっていることから、よりよい人間関係を築くことができるようになっていと考えられる。同年齢や異年齢の児童の集合体である学校において、児童の人間関係が安定していることで、学校での生活を安心して過ごすことができる。【勉強していて分からないところがあったら、誰かに相談して解決している】や【自分と異なる意見について考えることは楽しい】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、分からないことを分からないと素直に伝えることができるような人間関係が形成されていることや、自身の思いや考えを伝えようとするコミュニケーション能力が育まれていること、他者の考えや思いを受け止める受容的な態度が醸成されていることなどが考えられる。平成24年度の小学校学習指導要領状況調査分析結果でも明らかになったように、【自分で計画を立てて学習している】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、改めて、よりよい生活や人間関係づくりは、学力と相互に関係していることが考えられる。また、【自分にはよいところがある】の「当てはまる」と回答した児童が増えていることから、なすことによって学ぶ特質をもつ特別活動の中で、成功体験だけではなく、失敗体験も生かしながら自身のよさを実感していったと考えられる。

これらのことより、多くの時間を過ごす学校の魅力が向上していると考えられる。そして、学級での授業だけではなく、児童会活動や学校行事なども含まれる学校での生活において、自他のよさや可能性を認識し、お互いに協働して、よりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度が育まれていると考えられる。

表 2 児童アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和4年度 第1期研究会後	令和4年度 第3期研究会後	令和5年度 第3期研究会後
学校へ行くのが楽しい	88.2% (57.7%)	90.2% (59.2%)	93.8% (68.3%)
グループで活動することは楽しい	92.7% (67.5%)	93.6% (65.6%)	95.3% (73.4%)
自分にはよいところがある	83.8% (40.9%)	83.2% (42.2%)	87.3% (45.6%)
自分と異なる意見について考えることは楽しい	75.6% (34.5%)	79.2% (34.4%)	83.1% (36.1%)
自分で計画を立てて学習している	75.4% (39.5%)	81.8% (42.8%)	82.5% (45.3%)
勉強していて分からないところがあったら、誰かに相談して解決している	83.8% (53.8%)	86.1% (55.5%)	88.8% (61.5%)

※（ ）内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

②非認知能力の醸成・育成

（教職員アンケートより）

- ・児童がいろいろなことに前向きに挑戦しようとする姿が増えた。
- ・児童の主体性が高まり、話し合いや実践での反省を次回に生かすことができている。
- ・進行、フロアが役割を自覚し、話し合い活動が停滞することなく進むようになった。考えがつながるような発言が多くなり、建設的な話し合いもできるようになった。
- ・友達の意見を大切にするとことから、友達を大切にできる児童が増えた。

中央教育審議会において、「非認知能力とは、主に意欲・意思・情動・社会性に関わる3つの要素（自分の目標を目指して粘り強く取り組む、そのためにやり方を調整し工夫する、友達と

同じ目標に向けて協力し合う) からなる」と示されている*1。表3の【自分で決めたことはやり遂げるようにしている】や【将来の夢や目標をもっている】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、自分の目標をめざして粘り強く取り組むことができるようになっていると考えられる。そして、【人の役に立つ人間になりたいと思っている】を「当てはまる」と回答した児童が増えていることや、【友達が困ったときは、手助けしている】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、友達と協力し合いながら実践的な活動に取り組む中で、創意工夫を凝らしていることが考えられる。さらに、これらの結果に加え、【自分の活動や役割に、達成感を感じている】について肯定的な回答の割合が高まっていることや「当てはまる」と回答した児童が増えていることから、自己実現につながる非認知能力が醸成されるとともに、育成されていると考えられる。

表3 児童アンケート結果の一部

質問項目 (※文中は【 】で表示)	令和4年度 第1期研究会後	令和4年度 第3期研究会後	令和5年度 第3期研究会後
自分の活動や役割に、達成感を感じている	88.5% (51.3%)	89.0% (54.3%)	92.9% (59.2%)
自分で決めたことはやり遂げるようにしている	82.4% (40.1%)	87.9% (43.4%)	91.1% (46.7%)
将来の夢や目標をもっている	86.0% (64.7%)	86.1% (66.2%)	91.7% (71.0%)
人の役に立つ人間になりたいと思っている	92.7% (63.9%)	92.5% (67.3%)	95.6% (77.5%)
友達が困ったときは、手助けしている	94.1% (54.6%)	94.2% (56.1%)	97.3% (63.0%)

※ () 内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

③社会参画意識の醸成

(教職員アンケートより)

- ・自分の考えを発表して、みんなで意見をまとめることの大切さを実感している。
- ・自分たちの学校を自分たちでよりよくしようとする力や話し合いで解決する力、相手を思いやる心などが育ち、楽しい学校になってきていると感じる。
- ・自分たちで考え、提案し、協力して活動する楽しさを知ることで、主体的に活動する児童が増えたように感じる。

学校は一つの小さな社会であり、様々な集団から構成される。特別活動は、各活動・学校行事における様々な集団活動の中で、児童が集団や自己の課題解決に向けて取り組む活動である。集団の活動範囲は学年や学校段階が上がるにつれて広がりを持ち、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中でその資質・能力が生かされていく。表4の【学校ではルールを守って生活している】や【地域や社会をよくするために、何をすべきか考えることがある】、【地域の行事や活動に参加している】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、自発的、自治的な活動を積み重ねることで、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする社会参画意識が醸成されていると考えられる。

表 4 児童アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和 4 年度 第 1 期研究会後	令和 4 年度 第 3 期研究会後	令和 5 年度 第 3 期研究会後
学校ではルールを守って生活している	92.7% (42.9%)	92.8% (45.4%)	95.0% (50.0%)
地域や社会をよくするために、何をすべきか考えることがある	67.8% (27.7%)	71.7% (27.5%)	74.9% (35.8%)
地域の行事や活動に参加している	65.0% (31.9%)	69.1% (32.7%)	78.1% (47.9%)

※（ ）内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

（２）生徒の変容

２年間事業に取り組んだ徳島市Ｂ中学校、那賀町立Ｄ中学校、美馬市立Ｆ中学校のアンケート結果をまとめたものを基に、分析と考察を行う。「１回目の令和４年度第１期研究会後」、「１年目の研究のまとめである令和４年度第３期研究会後」、「２年間の研究のまとめである令和５年度第３期研究会後」の３回の結果について、肯定的な回答の割合と、「当てはまる」と回答した割合の一部を表に示す。

また、研究指定中学校の徳島市Ｂ中学校と那賀町立Ｄ中学校は、校区に研究指定小学校以外の小学校があり、その小学校からも生徒が入学するため、②信頼関係の向上については、校区が研究指定小学校のみの美馬市立Ｆ中学校の生徒からの学校アンケート結果について考察を行う。「研究指定校となる前の令和３年度後期」、「研究１年目の令和４年度後期」、「２年間の研究のまとめである令和５年度後期」の３回の結果について、肯定的な回答の割合と、「そう思う」と回答した割合を表に示す。

①生徒主体の場や機会の充実

（教職員アンケートより）

- ・ 特別活動を中心にする事で、生徒主体の話し合い活動を踏まえて行事を行ったり、生活心得の見直しができたりした。
- ・ 話し合いを生徒主体で進める力が高まっており、学校に話し合いの文化ができ、生徒会活動が活性化した。
- ・ コロナ関連の経験も踏まえ、精選された工夫のある交流会や行事等ができた。

中学校段階の生徒の成長過程における主な特徴としては、思春期に入り、親や周りの友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気付いていくことが挙げられる。また、内面の世界が周りの友達にもあることに気づき、他者との関係が自分に意味を与えてくれると感じるようになる。さらに、未熟ながらも大人に近い心身の力をもつようになり、大人の社会と関わる中で、大人もそれぞれ自分の世界をもちつつ、社会で責任を果たしていることに気付くようになる時期である。このように中学生の時期には、自我の目覚めや心身の発達により自主独立の要求が高まることから、生徒の自発的、自治的な活動を可能な範囲で尊重し、生徒が自らの力で組織を作り、活動計画を立て、協力し合って学びに向かう集団づくりができるように導くことが大切である。表５の【学校へ行くのが楽しい】や【自分にはよいところがある】、【自分の活動や役割に、達成感を感じている】、【自分で決めたことはやり遂げるようにしている】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、生徒が主体となる場や機会が充実していたこ

とが分かる。生徒主体の学校づくりにより、集団の一員としてよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育むことにつながると考えられる。

表 5 生徒アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和4年度 第1期研究会後	令和4年度 第3期研究会後	令和5年度 第3期研究会後
学校へ行くのが楽しい	88.0% (47.6%)	89.0% (43.8%)	89.3% (47.1%)
自分にはよいところがある	79.4% (31.9%)	81.3% (32.5%)	83.5% (36.2%)
自分の活動や役割に、達成感を感じている	84.4% (37.6%)	85.6% (40.2%)	88.3% (44.2%)
自分で決めたことはやり遂げるようにしている	88.0% (42.8%)	88.8% (43.1%)	89.7% (40.9%)

※（ ）内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

②信頼関係の向上

（教職員アンケートより）

- ・自分の思いや考えを話せる児童生徒が増えたことで、いじめや不登校が減ったと感じる。
- ・理由を添えて自分の考えを話すようになり、自信をもって発表できるようになってきた。
- ・物事を表面的に捉えるだけでなく、意義も踏まえて深く考えるようになり、スクールマナーの見直しを生徒たちが主体となって行うことができた。

中学校段階の生徒は、自主性が高まるとはいえ、生活体験や社会体験もまだ十分でなく、自分の考えにも自信がもてない時期でもあるため、教師の適切な指導や個別的な援助などが必要である。そのためには、個々の生徒をよく理解するとともに、集団の場面における指導や個別的な援助の在り方の工夫に努め、生徒の自主的、実践的な活動を促していくことが大切である。表6の【学校へ行くのが楽しい】や【先生は教え方にいろいろな工夫をしており、授業が分かりやすい】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、充実した学校生活を送っていると考えられる。そして、【先生は、いじめや悩み事など、私たちが困っていることについて、よく対応してくれる】や【私は、悩みや心配なことを、相談できる先生がいる】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、学校が生徒の安心できる居場所になっていることが分かる。そして、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な活動に、安心して取り組むことができていると考えられる。

表6 生徒からの学校アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和3年度後期	令和4年度後期	令和5年度後期
学校へ行くのが楽しい	80.0% (43.0%)	88.0% (47.0%)	89.0% (57.0%)
先生は教え方にいろいろな工夫をしており、授業が分かりやすい	95.0% (47.0%)	95.7% (51.7%)	99.0% (53.0%)
先生は、いじめや悩み事など、私たちが困っていることについて、よく対応してくれる	85.0% (45.0%)	85.5% (46.2%)	96.0% (52.0%)
私は、悩みや心配なことを、相談できる先生がいる	67.0% (39.0%)	73.6% (36.8%)	79.0% (41.0%)

※（ ）内の数字は、「そう思う」と回答した割合。

（3）教職員の変容

2年間事業に取り組んだ徳島市A小学校、徳島市B中学校、那賀町立C小学校、那賀町立D中学校、美馬市立E小学校、美馬市立F中学校のアンケート結果をまとめたものを基に、分析と考察を行う。「1回目の令和4年度第2期研究会後」、「1年目の研究のまとめである令和4年度第3期研究会後」、「2年間の研究のまとめである令和5年度第3期研究会後」の3回の結果について、肯定的な回答の割合と、「当てはまる」と回答した割合の一部を表に示す。

①児童生徒へのよりよい関わり

（教職員アンケートより）

- ・授業や日常の生徒との関わりの中で、児童生徒に任せる場面や発言を待つ場面を意識するようになった。
- ・特別活動への意識や授業の進め方、指導方法が分かってきた。
- ・教職員自身の知識やスキルが向上し、学校の教育活動全体で児童生徒の発言を引き出せるようになった。
- ・子供に機会を与えること、任せることの大切さを改めて感じた。
- ・児童生徒が将来的に集団の中で問題解決を図るためには、学校現場の中で多数決で物事を決めず、議論を通して、全員で納得解を得られるように努力することが重要であると感じた。

自己実現のために必要な資質・能力は、自己の理解を深め、よさや可能性を生かす力、在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、一人一人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれるものと考えられている。表7の【自校の児童生徒は、自分の思いや考えを、言葉や文章で相手に伝えることができる】や【自校の児童生徒は、相手の思いや考えを理解しながら聞くことができる】、【児童生徒一人一人に活躍の場を与え、その活躍を認めたり、ほめたりすることができている】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、教職員による価値付けが生徒にとっての他者評価となっており、自己の理解をより深めていると考えられる。そうした教職員の関わりによって、自己実現につながるための児童生徒の自主的、実践的な活動が助長されていると考えられる。

表7 教職員アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和4年度 第2期研究会後	令和4年度 第3期研究会後	令和5年度 第3期研究会後
自校の児童生徒は、自分の思いや考えを、言葉や文章で相手に伝えることができる	79.2% (8.3%)	81.3% (9.4%)	90.8% (4.6%)
自校の児童生徒は、相手の思いや考えを理解しながら聞くことができる	84.4% (8.3%)	91.7% (6.3%)	93.1% (14.9%)
児童生徒一人一人に活躍の場を与え、その活躍を認めたり、ほめたりすることができる	92.7% (35.4%)	96.9% (53.1%)	98.9% (51.7%)

※（ ）内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

②よりよい集団への向上

（教職員アンケートより）

- ・これまで学級会など特別活動の研究に取り組む機会がなかったため、十分な実践ができていなかったが、多くの指導助言を頂きながら、研究を深めることができた。
- ・各学級担任が学級活動を大切にするようになった。
- ・児童会や生徒会の活動を活発に行う手立てを学ぶことができ、日常の授業においても児童生徒自身が考えたり、自己決定したりする場面を設けるようになった。
- ・学校全体でめざす児童生徒の姿が明確になったため、児童生徒が主体的に活動できるよう計画を練ることができた。

学級は、児童生徒にとって、学習や生活など学校生活の基盤となるものである。学級がよりよい生活集団や学習集団へと向上するためには、教師の意図的、計画的な指導とともに、児童生徒の主体的な取組が不可欠である。表8の【めざす児童生徒の姿を意識し、学級集団や学校集団の育成に取り組んでいる】について肯定的な回答の割合が令和4年度第3期研究会後に少し下がっているのは、児童生徒理解が深まったことが要因と考えられる。そして、令和5年度第3期研究会後に高い割合となっているのは、教職員の指導の方向性が明確になってきたと考えられる。そして、【週1時間の学級活動の授業の内容は、教員同士で話し合ったり、年間計画に基づいたりして決めている】について肯定的な回答の割合が高まっていることから、めざす児童生徒の姿を実現することができるよう、意図的、計画的に指導が行われるようになってきていることが分かる。【児童生徒が協力したり話し合ったりして主体的に自己決定や集団決定ができるよう、内容を工夫している】について肯定的な回答の令和5年度第3期研究会後の割合が令和4年度と比べて下がっているのは、教職員の異動も要因として考えられる。しかし、「当てはまる」と回答した割合が高まっていることから、児童生徒の自主的、実践的な活動が継続して行われており、その活動がよりよくなるよう研究が進められていたと考えられる。

表 8 教職員アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和 4 年度 第 2 期研究会後	令和 4 年度 第 3 期研究会後	令和 5 年度 第 3 期研究会後
週 1 時間の学級活動の授業の内容は、 教員同士で話し合ったり、年間計画に 基づいたりして決めている	84.4% (27.1%)	84.4% (31.3%)	88.5% (37.9%)
児童生徒が協力したり話し合ったりし て主体的に自己決定や集団決定ができ るよう、内容を工夫している	93.8% (30.2%)	95.8% (35.4%)	93.1% (41.4%)
めざす児童生徒の姿を意識し、学級集 団や学校集団の育成に取り組んでいる	97.9% (41.7%)	94.8% (39.6%)	98.9% (50.6%)

※（ ）内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

③接続を意識した学校全体での取組の深化

（教職員アンケートより）

- ・小学校の授業において、中学 3 年生の姿をイメージしながら指導ができるようになった。
- ・今後も小学校と中学校で連携して研修をする機会を設ける必要がある。
- ・学習活動を考える際、児童生徒が主体的に活躍できる場を考えるようになった。

集団活動における話し合い活動では、進め方や合意形成の仕方、チームワークの重要性や集団活動における役割分担など、集団活動を特質とする特別活動の前提に関わる基礎的な資質・能力について、積み重ねを生かしつつ、発達段階を踏まえて更に発展させていくことが求められている。表 9 の【児童生徒の課題を見据え、本事業で連携している学校間で、小から中への連続性に着目した取組をしている】について肯定的な回答の割合は高まっているが、「当てはまる」と回答した割合が令和 4 年度第 3 期研究会後に少し下がっているのは、交流ではなく、連携を図ることの重要性を意識して取り組んでいたからだと考えられる。9 年間を見通した指導の在り方についての取組の研究により、令和 5 年度第 3 期研究会後に肯定的な回答の割合は高まっている。また、【特別活動以外でも、児童生徒が主体的に活動できるように取り組んでいる】について肯定的な回答について、令和 5 年度第 3 期研究会後の割合が令和 4 年度と比べて下がっているのは、教職員の異動も要因として考えられる。しかし、「当てはまる」と回答した割合が高まっていることから、学校全体での研究が進められ、取組が浸透していることが分かる。

表 9 教職員アンケート結果の一部

質問項目（※文中は【 】で表示）	令和 4 年度 第 2 期研究会後	令和 4 年度 第 3 期研究会後	令和 5 年度 第 3 期研究会後
児童生徒の課題を見据え、本事業で連 携している学校間で、小から中への連 続性に着目した取組をしている	86.5% (30.2%)	88.5% (22.9%)	88.5% (35.6%)
特別活動以外でも、児童生徒が主体的 に活動できるように取り組んでいる	94.8% (27.1%)	95.8% (32.3%)	94.3% (43.7%)

※（ ）内の数字は、「当てはまる」と回答した割合。

2 課題

本研究では、研究会への参加や各校との電話連絡による情報共有、児童生徒・教職員全体へのアンケートによる成果や課題の検証を目的としたため、個々の活動状況を基にした成果や課題の検証には至っていない。今後は、児童生徒一人一人の変容に着目できるよう、学校と連携を図りながら、検証方法を検討していきたい。令和5年度第3期研究会後の教職員アンケートとして「2年間（今年度異動してきた方は1年間）の研究会を終えて、課題に感じていることがあれば、書いてください。」から得られた回答は次のとおりである。

（教職員アンケートより）

- ・ 今後、どのようにして事業の成果を持続していくかを考えていかなければならない。
- ・ 話し合いへの参加が難しい児童生徒への支援・手立てをさらに学ぶ必要がある。
- ・ 児童生徒が自分の意見を発表することは勇気がいることを痛感し、発表できるようになるまで時間がかかることが分かったため、計画的に取り組む必要を感じた。
- ・ 本エリアの児童生徒が、主体的に考えて行動することに対して苦手意識をもっていることを改めて感じたため、低学年から学級会に積極的に取り組み、主体性を養いたい。
- ・ 司会が中心になって進める台本に沿った話し合いは、日常的にできるようになってきた。今後は、司会を置かずに児童生徒同士で意見をつなげていくような話し合いへと転換を図っていきたい。
- ・ 児童生徒が本気になればなるほど、時間が必要になってくるため、他の教育活動に支障が出ないようにして、無理なく続けられる持続可能なスタイルを模索する。
- ・ 異動で教職員が入れ替わる中で、教育課程や学校行事等とのバランスを取りながら、学んだことを共有・継続していくことが大切である。
- ・ 深まりのある話し合いへの導き方や議題の立て方等をさらに検討する。
- ・ 学級活動の時間や職員での共通理解の時間を確保する。
- ・ 全教職員の協力と連携が重要になると感じた。
- ・ 話し合い活動を他教科でも生かし、相乗効果につなげられるようにする。
- ・ 小中の距離が離れているため、今後も意識して、継続的に小中の連携を図っていくことが必要である。

V おわりに

令和6年度は、新たな研究指定エリアの美馬市立G小学校と美馬市立H中学校において、令和5年度までの成果や課題を生かしながら、研究を進めている。その中で、滋賀県教育委員会が主催している「しが生徒会オンライン交流会」へ美馬市立H中学校が参加することとなった。美馬市立H中学校代表として参加した生徒は、参加を希望した滋賀県内の16校の中学校生徒会とともに、自校の取組を発表し合い、自校をよりよくするためにできることを考え、協議を行った。参加した生徒からは、「県外の中学生との交流は初めてでしたが、とても楽しく勉強になり、有意義な時間を過ごすことができました。チャイムの2分前に音楽を鳴らしたり、ピンクシャツを着て登校したりしていることを知り、参考になりました。」や「他校と交流することで、自分たちの活動を小規模に感じました。こういう交流はよい刺激になるので、もっと交流をして、学びを学校生活に生かしていきたいです。」などの感想があり、「徳島県内の中学校の生徒会とも交流してみたい」という強い願いを聞いた。

こうした成果を受けて、徳島県教育委員会がサポートするという形で、「OUR徳島いきいき生徒会オンライン交流会」を開催することとした。県内の中学生が各校の取組について情報交換を行い、学校等をよりよくしていくための自治的活動の活性化をめざして、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」に係る資質・能力を育成するとともに、主権者としての意識の涵養につなげることを目的としている。生徒からのメッセージ動画を視聴できるよう二次元コードを添付したチラシで（図26・図27）、徳島県内の中学校へ参加校の募集を行った。多くの方々の協力を得ることができ、徳島県内の15校の中学校生徒会が参加して、交流や協議を行うことができた。



図26 二次元コード



図27 「OUR徳島いきいき生徒会オンライン交流会」のチラシ

今後も、特別活動の充実を図り、児童生徒の自発的な思いを大切にしながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた取組が行えるように県教育委員会としてサポートしてまいりたい。

*1 中央教育審議会 初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会―第2回会議までの主な意見等の整理―」、2021年、2頁。

参考文献

- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』、2018年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』、2018年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』、2018年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』、2018年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校 特別活動）』、2021年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校 特別活動）』、2021年
- ・文部科学省／国立教育政策研究所教育課程研究センター『特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』、2018年
- ・中央教育審議会 初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会―第2回会議までの主な意見等の整理―」、2021年